

一 以本願故 說三乘法の事

仰せに云はく、此の經文は身子尊者成道の国、離垢世界にて三乗の法は惡世には非ず、然りと雖も身子本願の故に説くと云へり。其の本願とは、身子菩薩の行を立てし時、乞眼婆羅門に眼を乞ひ取られて、其の時菩薩の行を退轉せり。此の菩薩の行を百劫立てけるに六十劫なして今四十劫たらざりき。此の時乞眼に眼をくじりとられて、其の時菩薩の行を退して願成仏日開三乘法の願を立てたるなり。上品淨土不須開漸なれば三乗の法を説く事更に以てあるまじけれども、以本願故の故にて三乗の法を説くなり。此の行は禪多羅仏の所にて立つるなり。此の事は身子が六住退とて大なる沙汰なり。重々の義勢之有り。輒く意得難き事なり。或は欲怖地前の意、或は權者退云云。所詮六住退と云ふは、六根六境に菩薩の行を取りたりと云ふ事なり。之を以て之を思ふに、末法当今法華經を修行せんには、必ず身子が退轉の如くなるべし。所詮身子が眼を取らるゝは、菩薩の智慧の行を取らるゝなり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經の眼を持ち奉るに、謗法の諸人に障碍せらるゝ、豈眼をくじり取らるゝに非ずや。所詮彼の乞眼婆羅門の眼を乞ひしは、身子が菩薩の行を退轉せしめん為に乞ひ、ふみにじって捨てたり。全く菩薩の供養の方を本として眼をば乞はざりしなり。只退轉せしめん為なり。身子は一念菩薩の大成を立てゝかゝる事に値へり。向後は菩薩の行をば立つべからず、二乗の行を立つべしと云ひて後悔せし、其の故に成仏の日に三乗の法を説くなり。所詮乞眼婆羅門の責めを堪へざるが故なり。法華經の行者、三類の強敵を堪忍して妙法の信心を捨つべからざるなり。信を以て眼とせり云云。